

第6回特別展

◆ 近江の巨匠——海北友松 ◆

かいほうゆうしょう

平成9年3月4日(火)～30日(日)



放馬図(右隻、第三・四層)

紙本墨画金泥引 六曲一双

奈良・松尾寺蔵

近年に見いだされた作品。溪流で野馬達が憩うその様は、不思議な光景に映りますが、同様のモチーフによる作品は、この時代には少なからず描かれています。とりわけ本作にみる馬の描写は、陰影めいた墨使いによるみごとにデッサン力と豊かな表情があり、また、溪谷の景観も従来の山水画とはまるで異なる発想をみせています。同時代の絵師たちに比べ、友松がいかに自由な精神で絵を描いていたかが推し量れます。

海北友松(一五三三～一六一五)は桃山時代後期の画壇において独自の活躍をし、日本美術史にその名をとどめた巨匠です。

友松は浅井長政の幕僚、海北綱親の子として近江の国坂田郡に生まれました。戦により一家滅亡の憂き目を見るものの、海北家再興の志を抱きながら画業に進進し、絢爛豪華な桃山文化の爛熟のなかで、武人の魂を水墨に託し、同時代の他の絵師たちとは一線を画した名作を生み出しております。

技量の冴えを見せつつも、型にはまることなく、意のままに走る筆勢。時に荒々しく、時に湿润な、味わい深い墨技。そしてなによりも友松の世界には、我が道を行くという信念があります。それが彼の絵に、時として凄味を与え、時としてえもいわれぬ自由な雰囲気を感じさせるのでしょうか。

狩野永徳・山楽、長谷川等伯、雲谷等顔、曾我直庵など巨匠が輩出した桃山後期の画壇にあっても、その独自の画境は際立っているといても過言ではないでしょう。当然、彼を取り上げた展覧会は過去にいくつもありました。滋賀県でも、滋賀県立琵琶湖文化館において昭和六一年に友松の展覧会が開催されております。

その後一〇年を経て、友松研究はあらたな成果を重ねております。かつては不明確であった建仁寺障壁画制作以前の画業にも、近年になって照明が当てられるようになり、また、最晩年の押絵作品群も少なからず取り上げられてきております。本展はそれらの新たな成果を踏まえた友松の画業を、近江の地で回顧するとともに、これまで公開される機会がなかった作品など、重文六件を含む計四〇件あまりの作品と史料によって紹介しようとするものです。

特別展の内容

☆展覧会は次のコーナーから構成されます

- 1 近江と海北友松
- 2 友松様式の確立―建仁寺の大画面作品群を中心に―
- 3 山水と雲龍―慶長七年までの友松―
- 4 多彩な水墨画から枯淡の境地へ
- 5 海北家伝来の粉本群

☆おもな展示作品

「遠浦帰帆図（瀟湘八景図）の内」

紙本墨画金泥引 一幅

個人蔵

「瀟湘八景」は北宋時代成立の画題とされ、近江八景の本歌です。現在の中国湖南省の洞庭湖周辺および、湖に注ぐ瀟水・湘水の合流地点周辺の八つの山水の情景を主題とし、室町時代以降、日本でも盛んに描かれています。荒くも潤いのある筆致と、墨と金泥をおぼろに刷くことによつて、友松はそれらの情景を象徴的に表現しています。

他図の賛者により慶長七年（一六〇二）以前の作であることがわかっています。本図の賛は五山の僧、南北玄興。



人物花鳥走獸図のうち雲龍

紙本淡彩 六曲一双

中宮寺蔵

雲龍図、それは友松が最も得意としていたであろう画題のひとつに間違いなく、また周囲の評価もすこぶる高かったようです。史料には、朝鮮国王による愛蔵や高官による友松の画龍への賞賛が記されているほどです。本図は、障屏画の大画面とは異なり、押絵貼屏風に貼り付けられた押絵の一図ですが、その構図と墨技は、暗雲たちこめる中、まさに龍が嵐を巻き起こさんとする迫力をみなぎらせています。

山水図

紙本墨画 六曲一隻

東京国立博物館蔵

名園桂離宮を造営した八条宮智仁親王（一五七九〜一六二九）の注文により描かれた作品。落款には慶長七年（一六〇二）十一月の年記があり、その時期に制作されたことが親王の日記からも確認できます。

様式化の進んだ構成や描写をみせる狩野派の山水の世界とは異なる、友松独自の描写が特筆される作品です。実在感のある描写でありながら過剰な写生でもない、この落ち着いた情景は、その自然なバランスにあるのでしょうか。



◆ 絵図に見る大津百町 ◆

1月28日(火)～2月23日(日)



近江国滋賀郡大津全図 (部分) 明治7年頃、217.0×320.6cm 本館蔵

歴史博物館では、新春の一月二十八日(火)から二月二十三日(日)まで、特別陳列「絵図に見る大津百町」展を開催します。

ここでいう「大津百町」とは、江戸時代、港町・宿場町として発展した大津町の賑わいぶりを表現する言葉として使われています。町の範囲は、現在の浜大津周辺からJR大津駅あたりにかけて、小学校区でいえば中央・逢坂・長等学区一带にあたっており、その範囲に小さな「町」が一〇〇カ町もひしめきあっていました。それが「大津百町」と名付けた所以です。最盛期の元禄時代には人口一万八千人を数え、湖岸には琵琶湖諸浦から集まる荷物の荷揚げ場や各藩の蔵屋敷が軒を連ね、中心部には大名の宿泊する本陣や、人足・馬を旅人に提供する人馬会所が置かれました。

こうして繁栄を見せた大津町は、明治十三年の東海道線敷設によって大きく変化します。当初馬場駅(現膳所駅)からスイッチバックして浜大津に向かう線路があり、その線路は湖岸を埋め立てることによって敷設されたのです。大正期には私鉄(現京阪電鉄)も市街地を通るようになり、道路も拡張されていきます。こういった景観の変化は、現在も続いているのです。

本展では、江戸時代から明治時代の絵図三五点や明治以降のなつかしい古写真を展示することによって、かつて繁栄を遂げた旧大津町の景観の変遷を紹介します。

特別陳列の概要

1 大津清水町絵図

縦八三・六cm、横七八・二cm

紙本淡彩 元禄八年(一六九五)

元禄八年十月、大津代官小野半之助(宗清)は、大津百町の各町に対して詳細な実測図面の作成、提出を命じます。このとき作成された絵図は現在、一〇〇カ町のうち実に七〇町以上が残されています。特定の年度にこれだけの絵図が揃うのは、全国的に見てもきわめて珍しいことで、大津町の様子を明らかにできる貴重な資料と言えます。

左の絵図の写真は清水町(逢坂一丁目)で、八町筋(旧東海道)の両側に並ぶ家屋敷の間口・奥行き・戸主、関清水大明神や関清水、家の背後を流れる川筋などが、何色にも色分けされて描かれています。



大津清水町絵図(部分)

2 近江国滋賀郡大津町全図

縦二一七・〇cm、横三二〇・六cm

紙本淡彩 明治七年(一八七四)頃

前ページにカラーで掲載した絵図です。明治七年、大津百町の各町では詳細な実測図が作成され、各家の面積や地番が確定されます。それらを基礎にして作成されたと考えられるのが、この大きな全図です。明治初年の地図は、まだ江戸時代の景観そのものといっても過言ではありません。湖岸線から陸地に大きく入りこんだ船入り堀(川口堀や大橋堀など)や少し突き出た棧橋、現京阪電車浜大津駅の北部にあった大津代官所や米蔵の輪郭などが、はっきりと分かります。

3 滋賀郡湊町地籍全図

縦七二・〇cm、横一〇〇・八cm

紙本淡彩 明治十七年九月

本展では、各町の地籍全図のうち明治七年と同十七年作成の二種類の絵図を展示します。東海道線(現JR)が京津間に開通するのが明治十三年なので、二種類の絵図を比較すると、どのようにして線路が敷設されたのが一目瞭然です。下の絵図は湊町絵図の部分です。湖岸(写真上部)の線路が分かるでしょうか。また左の写真は当時の湖岸を走る蒸気機関車。湖岸に積まれた米俵や船の一部が見えています。

本展では、これらの絵図三五点と大津町復元図、それに当時の様子を伺うことのできる古写真などを展示し、旧大津町の景観の変遷を分かりやすく解説します。是非とも御来場いただき、昔の大津町に思いを馳せてみてください。本展は、常設展示の観覧券(二〇〇円、一般・個人)で御入場いただけます。

本館蔵

本館蔵



Otsu Harbour, O-mi. 景の湊津大 江近
湖岸を走る蒸気機関車 長等神社蔵



滋賀郡湊町地籍全図(部分)

ふるさと大津歴史教室の十一年

『ふるさと大津歴史教室』が、初めて開講されたのは昭和六十一年（一九八六）のことで、ふと気がつけば今年です。十一年目を迎えたことになりました。

歴史教室は、歴史博物館のいわば前身ともいえる大津市史編さん室の事業を引き継いだものです。当時、同編さん室では「新修大津市史」通史編の刊行を終え、地域編の最後を飾る第九巻の発刊を目前にしています。市史の編纂にあたっては、大津市内の歴史・美術・民俗・考古に関する調査を継続的にここない、それぞれの分野に関するさまざまな情報を入手し整理してきました。その情報は、市史や市史に記載できなかったものは「ふるさと大津歴史文庫」でも紹介しています。大津は寺院や史跡の観光化が進んでいないためなのか、まだまだ人に知られていない史跡や名宝あるいは伝説などが残されています。そうした埋もれた史跡などを中心に見学会を開くことにより、収集した情報を生の声で伝え、身近な大津の歴史や文化を再認識してもらおうと『ふるさと大津歴史教室』が計画されました。ですから歴史教室の見学先は、有名社寺よりも余り知られることのない史跡が中心であり、それらを一泊あるいは半日かけて適度にそしてできるだけ安全に拝観・見学できるようにコースが設定されています。

隠れた史跡などにスポットをあてようとするため、普段は一般に公開されていない拝観・見学先の方々に無理をお願いすることも少なくありません。しかし、いずれも歴史教室の趣旨に深いご理解をいただき、秘伝でもないかぎり、拝観・見学を断られたことがない

のは幸いなことです。ただ、小雨の日などはどうしても足元が汚れがちになってしまっています。そういう日は、拝観・見学先を汚してしまわないか、折角のご好意を仇で返すことになりはしないかとひやひやしてばかりいます。

歴史教室は、今後もさまざまな方々のご好意を得、またご迷惑をかけることもあるかもしれませんが、本来の趣旨に則りつつ、年度ごとにさまざまなバリエーションを加えて開催してゆきたいと考えています。

(山崎 和宏)

ふるさと大津歴史教室事業一覽

〔昭和六十一年度〕

小関越と関禪丸神社・比叡山横川とその山麓・壺笠山と穴太の里・諸浦の親郷堅田・膳所の城下・六道絵の世界・瀬田唐橋と近江国分寺・大津京と崇福寺

〔昭和六十二年度〕

門前町坂本・壺笠山と穴太の里・瀬田唐橋と石山寺・膳所焼と記念寺・水郷堅田と淡海節・皇子山古墳と園城寺・瀬田川洗堰と大石の里・立間観音と大津別院

〔昭和六十三年度〕

仰木の里に秘仏を訪ねて・小関越と大津別院・瀬田唐橋と建部大社・膳所焼と記念寺・瀬田川洗堰と大石の里

〔平成元年度〕

膳所焼と記念寺・穴太の里と穴太廃寺・下阪本の史跡を訪ねて・田上の歴史をさぐる・園城寺と長等周辺

〔平成二年度〕

膳所焼と記念寺・逢坂の歴史と伝説を訪ねて・瀬田唐橋と建部大社・仰木の里に秘仏を訪ねて

〔平成三年度〕

粟津湖底遺跡と水墨画の世界・膳所焼と記念寺・

近江大津京跡と南滋賀町廃寺・坂本の里坊庭園・葛川溪谷に文化財を訪ねて

〔平成四年度〕

膳所焼と記念寺・瀬田唐橋と近江国府・雄琴の里に古社寺を訪ねて・小関越と大津別院・葛川溪谷に文化財を訪ねて

〔平成五年度〕

大津別院と町並み博物館通り周辺・膳所焼と記念寺・葛川溪谷に文化財を訪ねて・西教寺と坂本里坊庭園・諸浦の親郷堅田・大石の里に歴史をさぐる

〔平成六年度〕

膳所焼と記念寺・仰木の里に秘仏を訪ねて・葛川溪谷に文化財を訪ねて・戦国時代の城跡をさぐる・下阪本の歴史をさぐる・東海道をあるく

〔平成七年度〕

膳所焼と記念寺・坂本美術散歩―障壁画と大津絵―・葛川溪谷に文化財を訪ねて・渡来人の史跡を訪ねて・諸浦の親郷堅田・皇子山古墳と長等周辺

〔平成八年度〕

葛川溪谷に文化財を訪ねて・山中越えの旧道と壺笠山・彦根城とその周辺・下阪本の史跡を訪ねて・田上の歴史をさぐる・金勝寺とその周辺

れきはくインフォメーション

3月		2月		1月	
土	29 第15回土曜講座 友松と桃山画壇 13時30分～15時 講師 小崎 善通 (京都市文化財保護課講師)	土	15 第14回土曜講座 近江猿楽の歴史 13時30分～15時	土	18 第10回土曜講座 古典文学と大津 13時30分～15時
土	22 記念講演会 海北友松の画業について(仮題) 13時30分～15時 講師 武田 恒夫 (大阪大学名誉教授)	土	8 第45回塾生講座 和綴本を作る 10時30分～12時	土	1 記念講演会 旧大津町の町構成と景観 13時30分～15時 講師 大塚 修 (京都府立大学助教)
土	8 第45回塾生講座 和綴本を作る 10時30分～12時	土	22 第13回土曜講座 大津町の年中行事 13時30分～15時	土	8 第44回塾生講座 大津絵ってどんなもの？ 10時30分～12時
土	15 第14回土曜講座 近江猿楽の歴史 13時30分～15時	土	15 第12回土曜講座 絵図に見る大津百町 13時30分～15時	土	15 第12回土曜講座 絵図に見る大津百町 13時30分～15時

※講師名を記していない講座は本館学芸員が担当いたします。
※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい。

〈特別展〉
近江の巨匠—海北友松
3月4日(火)～30日(日)

〈特別陳列〉
絵図に見る大津百町
1月28日(火)～2月23日(日)

収蔵品紹介 26

蒸気船涉湖丸錦絵

縦三五・七 横五〇・一

本館蔵

琵琶湖は古くから、物資運搬の大動脈として重要な役割を果たしてきました。その担い手は、丸子船と呼ばれる木造帆船でしたが、明治二年（一八六九）一番丸が湖上に浮かび、琵琶湖は本格的な蒸気船の時代を迎えます。風まかせの帆船が数日を要した航路を、蒸気船はその日のうちに到着し、しかも荷物積載用の丸子船を曳船することで大量輸送もできました。帆船の時代に比べ蒸気船の登場は、画期的なできごとだったので、この便利さから次々と建造され、明治二年から十年までの間に十五艘の蒸気船が浮かびました。

涉湖丸もその一艘で、明治五年九月に大津で建造された七番目の蒸気船です。十五馬力、十四トンの外輪船で、船主は大津町の池田氏。この船のキヤッチコピーは、「琵琶湖飛脚船涉湖丸」。つまり、当時の船の中では最も早いことが自慢だったようです。涉湖丸には、運賃と時間表の資料が残されていますが、それを見ると、大津を正午に出航した船は、午後三時には大溝（高島町）へ、そして船木（安曇川町）・飯浦（木之本町）を経て塩津着が午後六時となっています。六時間で湖西ルートを縦断し、翌日は大津に向かう船となります。時刻表には、下り「はんの日」（奇数の日）、大津への上りは「てうの日」（偶数日）に就航したと表現されています。

主に荷物を運んでいた木造帆船の時代から、人々の日常的な足としての蒸気船の時代へ、琵琶湖をめぐる交通事情は、大きな変貌を遂げてゆくのですね。

(和田光生)



大津歴博だより No.28
平成8年12月15日

大津市歴史博物館
〒520 大津市御陵町2-2 ☎ (0775) 21-2100